随筆集

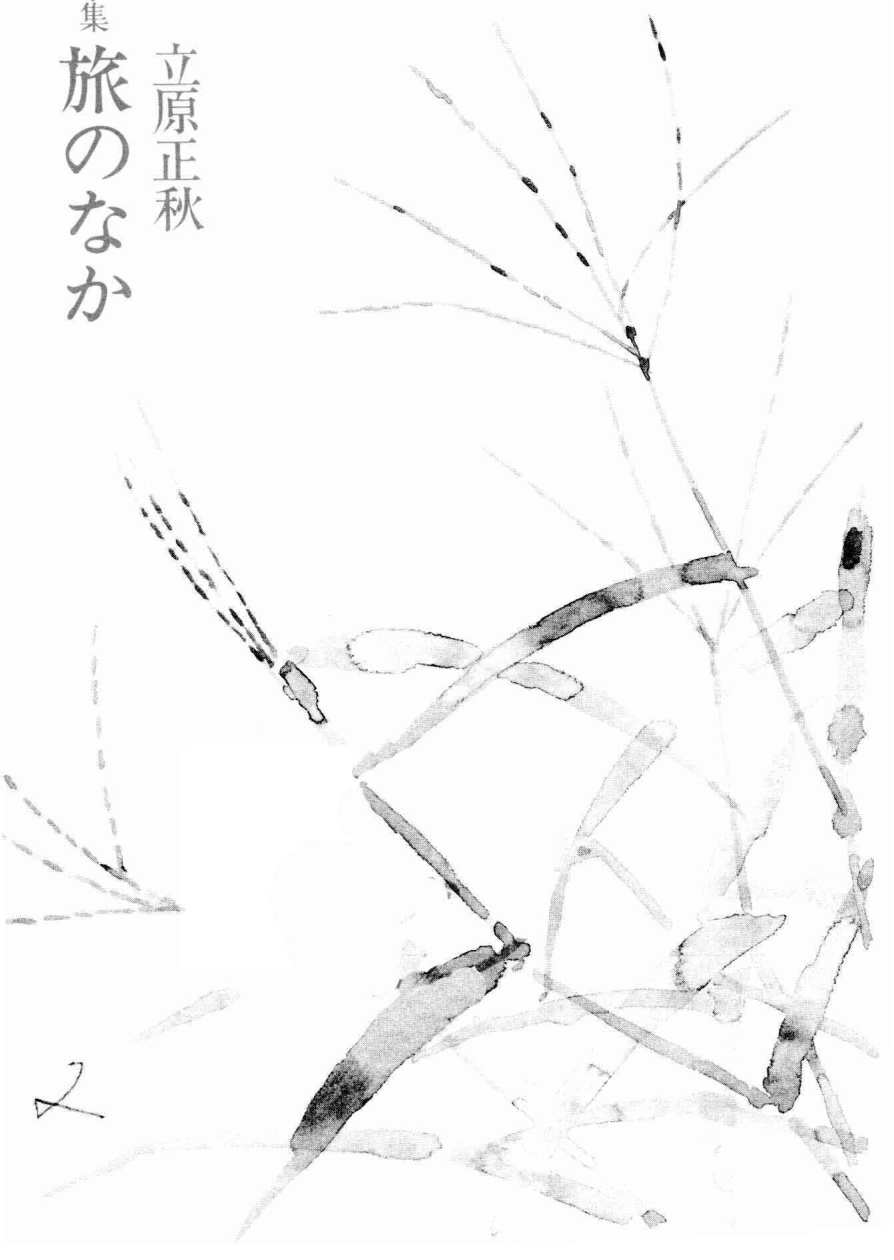
旅のなか

立原正秋

随筆集

旅のなか

立原正秋



旅のなか
立原正秋

昭和五十二年八月三十一日　初版発行
昭和五十二年十月　十　日　再版発行

発行者　角川春樹
発行所　角川書店
東京都千代田区富士見二―十三
（電）〇三（二六五）七一一一　大代表
（振）東京三―一九五二〇八（郵）一〇二

暁印刷・宮田製本

Printed in Japan　落丁・乱丁本はお取替えいたします
0095-883067-0946(0)

随筆集

旅のなか——目次

I

法師温泉行　9
「近代文学」の人達　12
春の便り　17
滅亡を生きた人—武田泰淳氏追悼—　21
死者への手紙—舟橋聖一氏追悼—　24
薪能の起源　29
鎌倉薪能におもう　30
一年の後に—角川源義氏追悼—　35
〝読む〟ということ　36
藤枝静男著〈田紳有楽〉評　37
村松剛著〈評伝アンドレ・マルロオ〉讃　38
キキ著〈頭痛天体交響楽〉讃　39
金子晋著〈鎌倉再見〉讃　40
随筆集〈夢幻のなか〉の周辺　41

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

〈日本の庭〉を書き終えて　43
昭和四十五年版〈文学選集〉あとがき　45

II

無限の喚起力—東山魁夷覚え書—　51
＊
富貴寺のおもいで　64
耽美的な像　65
モーツァルトと魚　67
一枚のレコード　72
亀甲と麻の葉—懐しい柄—　75

III

端正な美の世界—安宅コレクション・朝鮮陶磁展—　83
貴族的で柔かい風姿—李朝白磁青花梅竹文壺—　90
高麗李朝十選　91

飄逸の向う側に—辰砂面取松鷹図瓶— 98
美の堅固—明清工芸展を観て— 101
典雅なる逸品—宋・白釉黒花牡丹文梅瓶— 103
明の華—青花竜波濤文天球瓶— 104
土と薪の芸術の味 105
*
匂う磁器の膚—肥前有田行— 107

IV

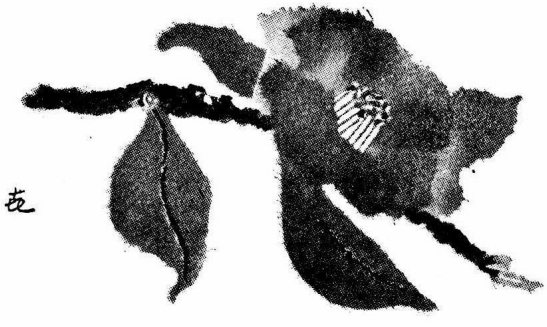
書斎の夏 121
私と八月 124
山桜の頃 125
ことしの雪 127
脳髄の乾燥について 129
樹木ともみじ 133
滅びゆくもの 135

厄介な読者　139
＊
春の味覚　140
再び厨房に入る　141
夕河岸　145
めざし　147
里の味　150
V
東ヶ谷山房だより　155
＊
単独旅行者の眼　174
トレドでの一日　181
この一年　184
あとがき　193
初出紙誌一覧　195

装幀・装画　堀　文子

中扉貼絵　和田喜美子

I



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

法師温泉行

藤枝長老は、去年の下半期に東京新聞の文芸時評を担当したが、一月のはじめ、東京新聞文化部の渡辺哲彦氏から、御老体に鞭打って半年がんばったから慰労会をやってあげよう、と中野孝次氏が言いだしたが、どんなものだろう、と伝えてきた。それは御本人次第だから爺さまに伺いをたてた方がよい、と私は答えておいた。折りかえし渡辺氏から、爺さまは喜んでいた、と言ってきた。そこで一月末に東京でごく内輪の慰労会をやった。あつまった者は旧「犀」の同人のほか、水上勉、坂上弘、川村二郎、中上健次、吉田知子氏がいた。小川国夫は当日東京に滞在していたがマグダラのマリアにつかまって出られない、と編集者が伝えてきた。編集者は「群像」「文藝」「海」「文芸展望」から出席していたから、そのうちの誰かであった。

「僕が若い者達からこんなに好かれているとは知らなかった。実にうれしいよ。今日のことは平野や本多にはだまっていよう」

と長老はすこぶる機嫌がよかった。

私は原稿の締切日を数日後にひかえていたので会が終ってからまっすぐ鎌倉に戻ったが、あくる日きいたところでは、長老は午前三時まで新宿のバアで若い者達につきあった、ということだ

った。この会のとき、岡松和夫の芥川賞受賞を祝って旧「犀」の同人で三月下旬に一泊旅行で法師温泉に行く話がきまったが、長老から、僕も仲間にいれてくれないか、といわれ、連れて行くことになった。

法師温泉は高井有一が二十年以上も前からどこがよいのか通いつめており、ここ数年は後藤明生、加賀乙彦の三人連れでよく出かけていた。なんでも、ぬるい湯に一時間以上浸かり、それを日に五回か六回くりかえす、という話だった。私は岡松からこの話をきいたとき、連中は気違いだ、と言った。一日二十四時間のうち六時間湯に浸かるのである。滞在期間中ずうっとそうらしい。私は加賀にあったとき、いちど三人連れで精神科医に診てもらえ、と言っておいた。

ところが長老はこの法師温泉が殊のほか気にいったらしかった。温泉についたら雪がふっており、三人連れはさっそく長老を浴室に案内していった。私はあとから浴室におりていった。ずいぶん広い浴室だった。浴槽は、ふとい木で枠を組んで十二に仕切られており、湯加減は三段階にわかれていた。温泉趣味のない私は十分ほどで出てきたが、長老はれいの三人連れと同じ時間浸かっていた。あのせっかちな人が一時間浸かっていたのだから、よほど気にいったのだろう。三人連れは暁方の三時にまた一時間浸かりにいっていた。そしてあくる朝また何人かが浴室におりていったが、食事の時間になっても出てこないので、私がよびに行った。入口から、早く出てこい、と声をかけたが、返事がない。奥の方にいるらしく、湯気で顔もみえない。仕方なく残った者達で食事をすませたところへ連中が戻ってきた。若い女の子が二人、前をかくさずに男湯に入

ってきたので、見物していたということだった。長老に、眺めはいかがでしたか、ときいたら、僕はみなかったよ、と答がかえってきた。しかし加賀、後藤、高井は眺めたといっていた。ほかに白川正芳、鈴木一史、松島義一がちゃんとみたといっていた。つまり朝湯に行ったのはこの七人だった。

「俺の声がきこえなかったのか」

すると後藤が、

「うん、きこえた、きこえた。きこえたんですがね……」

後藤は特別な眺めがあるから私を湯にさそおうとしたが、加賀と高井から、返事をするな、もししたら殴る、と言われて返事をしなかったそうであった。私は、三人連れが、日に六時間も湯に浸かるためにこの温泉にくるわけを、はじめて、正確に理解した。

法師温泉の帰りは長老に鎌倉に一泊してもらうつもりで家人にもいってあったが、

「きみが心配するといけないのでだまっていたが、一昨日家内が手術をしてね……」

といわれた。奥さんは過去に腫瘍を一回手術をしていたが、それがこんどは付近に再発したということであった。みんなにはだまっていてくれ、といわれた。

帰りの列車は長老と私がいっしょの席で、他の仲間は一輛あとの車輛だった。仏像と骨董の話をした。上野駅についたとき、

「立原君、やはりさびしいよ」

とぽつんともらした。私は、冷静な科学者の目の裏から出たこの一言を胸にしまいこんだ。何事につけ、厳しさと優しさを同居させている人である。この男性的な視線を、私は大切にしたい。

「近代文学」の人達

あれはいつ頃からはじまっていたのか部外者の私は知らないが、まいねん六月か七月になると、藤枝静男さんが「近代文学」の同人を浜松の弁天島に招いて文学論をやりながら二泊する、という会が持たれていた。荒正人、佐々木基一、埴谷雄高、平野謙、本多秋五、山室静さんが「近代文学」終刊時の同人で、藤枝さんは平野、本多さんの友人としていわば「近代文学」の後援者であった。

この会に、私は昭和四十九年の六月、藤枝さんから、ことしはきみもこないか、とさそわれて浜松にでかけた。このときは前記六人のほかに小田切秀雄、久保田正文、元「群像」編集長の中島さん、それから小川国夫がきていた。これはまいねんの顔ぶれだ、ときには杉浦明平さんが加わることもある、と藤枝さんは話してくれた。私は文学的にはこの人達とは立場を異にしているが、心情的にはみんな尊敬している。

弁天島で先達のみなさんに会ったのはよい機会だったので、私はかねてからの疑問である「近

代文学」から日本の中世が欠落しているのは何故かをこの人達にきいてみた。本多さんには中世がみえていたが、しかしそれは十全とはいえない、と私は視ていた。小田切さん久保田さんにも中世はみえているはずだったが、この二人は故意にそこから目を逸らしている、と私は解釈していた。

すると埴谷さんが、

「それはいい質問だ。本多に答えてもらえ」

と言った。

そのときの本多さんの答を手帖に書きとめておいたが、要約するとだいたいつぎのようになる。戦争中、保田與重郎の存在が恐かった、もし中世に頭をつっこんだら保田のようになるのではないか、それで中世から目を逸らせていた、ということだった。

「それでは答にはなりませんよ。おかしな話じゃないですか」

「そうだ、たしかにおかしな話だ。いまから考えるとたしかにおかしな話だ」

本多さんは牽強附会をしない人である。小田切さんからの答はなかったし、久保田さんは、えへへへ、とわらっていた。埴谷さんは宇宙人だから答などでるはずがなかったし、平野さんは風景がまったく見えない人だから、これまた答など得られるはずがなかった。しかし私は本多さんの答を「近代文学」全体の答と看做してもよいなと考えた。

私は大戦末期に保田さんの著作をすこし読んだことがあった。そして戦後数年してからまとめ

て読んだが、この人の発想の軸はすべて風景ではないだろうか、と考えたことがあった。〈総力戦の哲学〉を説いていた西田学派などに比べれば、この人は一介の詩人にすぎなかった。私は保田さんを知らないし、保田さんを弁護するつもりもないが、こんな詩人は本当は時勢時節に応じた情況論のなかには入りこめないのではないか、といったことも考えた。保田さんを右側の人とすれば、左側では中野重治さんがやはりそうであろう。中野さんはたしか戦後に国会議員に立候補したことがあったが、これは政治家になるというより、志を述べるための立候補であった、と私は解釈している。中野さんが落選したとき私はほっとした記憶がある。保田さんも中野さんも、ともに土着の思想に立脚している点を、私は見逃せない。つまり私は「近代文学」の人達が保田さんを正当に評価せずに感情的に毛嫌いしている点を言いたいだけである。保田さんも中野さんも出発点は同じだったと思う。ただ中野さんは一筋の道を歩いて行ったが、保田さんは途中で情況に巻きこまれて自分を拡散させてしまった。

私のみるところ「近代文学」の人達はいつになってもみんな文学青年である。この人達は文学の話しかしない。戦後文学の存在をどうやって証明するか、いつもそんな話ばかりきいてきたように思う。弁天島でもそうであった。その意味でこの人達には余裕というものがみられない。いつだったか私は、あの人達はもしかしたら左の方の農本主義を打ちたて、村落共同体をつくろうとしたのだろうか、と考えたことがあった。いわば倫理を美に転換しようとした人達であった。美を倫理に転換できるように、もちろんこれは可能であったが、しかしこの人達はそれに成功し

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com